

「桐に恋して18年」  
はじめに

娘が生まれると桐を植えてその桐で筆筒を作り、娘を嫁がせる、実は正確ではありません。桐は植林から成木になるまで最低20年、それから雨に打たせてアクを抜きながら天干しして製品になるまで、都合25年の歳月は必要です。昔は十六歳から嫁ついでいましたから、その娘さんは周囲が心配するほど当時としては晩婚だった事になります。

この言い伝え、実はおじいさんが植えた桐の木を使ってお父さんが筆筒を作ったのに、酒の勢いで、『俺が植えた桐だ』と娘に見栄を張ったのがそのまま美談として流布されたのがどうやら真相です。桐の種類は寒暖や日長時間に適合して三十種類もあるので、南方の促成桐の話だったのかもしれませんが。

生まれたら桐の木、嫁に行けば桐筆筒、この世とのお別れは桐の棺桶、これほど日本人に親しまれてきた木でありながら、桐筆筒の名工から桐の原木生産地の目星は付けられる話はよく伺いますが、どの種類の桐が最も筆筒に適しているかという話題を耳にしたことはありません。桐はまだ奥の深い木なのです。

そんな桐を十八年間育て、新製品を開発してきた中で、桐特有の肌触り、断熱性、調湿性、耐火性、防虫性能、クッション性は、『アク抜き』（洪抜きと同意）工程を経た桐製品だけが有する機能であり、アク抜きをしていない漂白のみの桐製品では、逆にじめっとしたり、カビや変色に悩まされる事をつくづく体験してきました。

私がどうして桐に魅せられたか、国内外での桐の植林と『アク抜き桐』を利用した製品開発について、四回に渡る連載にお付き合いを頂きます。

(株)グリーンフラッシュユ.

代表取締役 八木 隆一